

カニバルのポートレート

— コロンブスからモンテーニュまで —

高岸 敦夫

はじめに

「カニバル」¹⁾は「人を食べる人間」という意味で流通している言葉であるが、近年になって我々の社会を読み解く重要なキーワードとしてしばしば取り上げられている。この語は1492年におけるカリブ海の島々の住人とコロンブス一行の接触によって生まれたものであり、西欧の植民地主義との密接な関係性の中で発展していったものである。そのためポストコロニアル批評において、ヨーロッパ人の植民地主義的意識を暴き出すものとして、カニバルの表象が盛んに論じられることとなったのだ²⁾。しかし「カニバル」という語は他者への根拠なき偏見を言語化したものとして批判される一方で、ブラジルなどの旧植民地では抑圧者に対抗することのメタファーとして称揚されるものでもある。また現代社会の様相を人食いのイメージと重ねて論じること、ジャック・アタリやレヴィ＝ストロース、ジャン・ボードリヤールなど多くの思想家・知識人によって試みられている³⁾。

本稿ではこのようなカニバルの表象の変遷を、この語の登場からモンテーニュのカニバルの登場までの時代に限定して、論じていくことにしたい。カリブ海の島々の住人とコロンブス一行が接触した15世紀末からモンテーニュが『エッセー』（1580年）でカニバルを取り上げた期間において、この語は西欧の植民地主義と共に歩み、大きな変容を遂げてきた。そして自分達の側の世界の有り様を映し出すものとして使われているモンテーニュのカニバルは、今日的なカニバルの表象の雛形とも呼べるも

のに至っている。本稿はこうした15世紀末から16世紀までのカニバルの変遷を辿ることが、食人言説研究において如何に意義のあるものなのかを明らかにしていきたい。

1. カニバルの登場

1492年のカリブ海の島々の住人とヨーロッパ人との接触は西欧の食人言説の歴史においても大きな転換期だったといわれている。食人習慣を持った民族については、後述するように古くはヘロドトスなどにみられるものであるが、古代や中世のヨーロッパ人にとって、食べる人間も食べられる人間も自分たちから遠く離れた異国に住む絶対的な他者とみなされてきた。それが大航海時代になり食人族への認識が全く違った意味を帯びようになったと指摘されているのである。ポストコロニアル批評の食人表象研究において、15世紀末から使われるようになった「カニバル」はそれまで使われてきたギリシア語起源の「アントロパゴイ」などと一線を画すものと見なされている。アントロパゴイがギリシア語で文字通り「人食い」を意味する語であるのに対して、カニバルは「野蛮人がヨーロッパ人を襲って貪り食うかもしれないという脅威を内包するもの」であったというのである⁴⁾。またカニバルはその起源や意味に不透明さを帯びた語であり、ラテン語起源の«canis»(犬)や«carnaval»(カーニバル)とも結び付けられることにもなった⁵⁾。

このカニバルという語が初めて言及されたのは『コロンブス航海誌』(以下『航海誌』と記す)の1492年11月23日の記録とされているが、そこには次のようなことが書かれていたとされている。

これはボーイオという広大な土地で、そこには額に一つしか目のない人間や、カニーバレス [canibales] とよばれる連中が住んでいるとのべ、彼らを非常に恐れているようであった。そして船がそちらに向かっていくのを見るや、彼らに喰われてしまう、彼らは武器をたくさんもっている、といて黙り込んでしまった、とのべている。

提督は、これはある程度事実かもしれないが、武器を持っているというなら、知恵がある人間だろうと考えた。そして、何人かが捕らえられて島へ帰ってこなかったため、喰われてしまったものと考えただと思うとのべている。彼らは、キリスト教徒たちや提督を、初めて見た時には同じように考えていたのである⁶⁾。

この文章は「カニバル」について書かれたものの初出とされているが、原典は失われており、バルトロメ・デ・ラス・カサスが1552年に要約したものである（そのためコロンブスも三人称で語られる存在であり、またしばしばその行動・認識が批判されている）。またテキストで書かれていることが事実であるにしても、コロンブス自身が実際にカニバルを見たわけではなく、同伴したインディオから聞いた話にすぎないのである。ラス・カサスはここでいわれているボーイオをエスピニョーラ島のことに違いないと見ていたが⁷⁾、ラス・カサスはエスピニョーラ島の住人に食人の習慣があることを断固として否定している。それに加えてカニバルは一つ目の怪人などと同じ類の噂話でしかないのだ⁸⁾。一つ目の怪人のような異形の民のイメージはヘロドトスやプリニウス、マルコ・ポーロ、ジョン・マンデヴィルなどの古代から中世にかけての旅行記やコスモグラフィの影響を色濃く受けたものであり、遠い異国にはこのような異形の人間が存在すると信じられてきた⁹⁾。わけても犬頭人はカニバルと関連性の深いものとして考えられてきたのだが、『航海誌』のカニバルの言及より少し前になる11月4日の記録には次のことが記されている。

一つ目の人間や、犬のような鼻づらをしていて、人を喰う人間がおり、人を捕まえるとすぐに首を切り、血を吸い、生殖器を切り落とす¹⁰⁾

犬頭人は古くはヘロドトスのリビア西部に関する記述に見られるものだが¹¹⁾、古代から中世にかけて、とりわけ好まれた異形の民の表象であり、キリスト教布教とも深い関わりを持つものであった。犬頭人は聖アウグ

スティヌスの『神の国』（5世紀初頭）の第16巻第8章でも奇怪な人間として紹介されたり¹²⁾、聖クリストフォロスが人食いの犬頭人として描かれたりしていた¹³⁾。またマルコ・ポーロの『東方見聞録』（1298年頃）では次のように、インド東岸地区にあるアングマン島（アングマン諸島）には犬頭人が暮らしている、と記されている。

島民は嘘いつわりではなく全くほんとうに頭も歯も眼もが犬に類している。頭部は特にそれがはなはだしくて、まるっきり猛犬そっくりである。[中略]。土人の性情は非常に残忍で、人をいけどりにすれば、それが同種人でない限り、すべてそれを食ってしまう¹⁴⁾。

このようにポーロは犬頭人の食人の習性を語っているが、ポーロ以上にヨーロッパ人が抱く異国のイメージに影響を与えた『マンデヴィルの旅』（1357年頃）もナクメラ（ニコバル諸島）にいるという食人習慣を持った犬頭人について言及している¹⁵⁾。こうしたカニバルと犬頭人の表象には多くの共通項があることはすでにピーター・ヒュームやデイヴィット・ゴードン・ホワイトらによって指摘されている。ヒュームはまた15世紀においてカニバルの語源は「canis」であると記された辞書が登場し、19世紀までその記述が残っていたことを指摘している¹⁶⁾。実際、フランソワ・ラブレーなどもカニバル（« canibales » ないし « canniballes »）という語句を使っているが、こうしたことと呼応するかのように彼の『第4の書』では、この語が「犬のような顔をして、笑う代わりに喚きたてる、アフリカの怪物的な人々」と説明されている¹⁷⁾。このように犬頭人とカニバルは深い関連性を持つものであり、そこからカニバルの表象は古代や中世に語られてきたオリエントに関する食人のイメージを引き継いだものだと目されている。ホワイトが指摘するように、犬頭人と人食い（カニバル）は両者ともにしばしばアマゾン族¹⁸⁾と併置されて言及されており、またそれらはスキタイと強い結び付きを持っていることでも深い関連性が見られるのだ。ホワイトは、キリスト教初期の聖人伝ではスキタ

イ付近にある食人族の国に布教するという逸話が好んで作られていたことを指摘し¹⁹⁾、犬頭人の神話はスキタイの食人族伝説が発展していったものであり、さらにそれが新世界に移植されていったことを論じている²⁰⁾。こうしたスキタイと人食いのイメージを結び付けたもっとも古いテキストはヘロドトスの『歴史』とされているが、そこには次のようなことが述べられている。

この先には広漠たる無人の荒野が続いているが、この無人地帯を過ぎたところにアントロパゴイ人が住んでいる。これは特異な民族で、スキュタイ〔スキタイ〕系では全くない。これより先はまさに無人の地で、われわれの知るかぎりでは、如何なる人間の種族も生息していない²¹⁾。

ヘロドトスはアントロパゴイ（人食い）人をスキタイ人と区別して言及しているが、彼の影響により後世においてスキタイは食人族の住む地として有名になり、さらにスキタイ人には食人の習慣があると一般化されるまでに至ったのである。

コロンブスの『航海誌』での一つ目の怪人や犬頭人、そしてカニバルの記述の批判的分析はポストコロニアル批評における食人表象研究の基本となるものだが、『航海誌』の記述の信憑性に対する疑義は『航海誌』を要約したラス・カサスがすでに示している。ラス・カサスはコロンブス一行とインディオとの意思疎通は困難なものであり、自分たちの認識に合わせて都合よく作り変えられたものなのではないかと考えていた²²⁾。とはいえ注意が必要なのは、コロンブスも新世界に異形の怪人がいることを否定していたということである。彼の第1回目の航海の報告には次のことが記されている。

これらの島々では、私は今日まで、多くの人が考えているような怪物にはあったことはありません。〔中略〕。

すでにのべましたように、私は怪物について聞いたこともありませんが、ただインディアスに入って二番目にあるクアリス島にはとても獐猛な、人間の肉を喰う人種が住みついております²³⁾。

コロンブスの否定に見られるように、遠い異国の地には異形の怪人が暮らしているという認識は、大航海時代を経てその実情が分かってきたことにより、徐々にではあるが否定されていくこととなった²⁴⁾。とはいえアマゾン族や巨足族（パタゴン）²⁵⁾などは16世紀以後も南米に実在すると長く信じられてきた。こうした中でカニバルの表象は、オリエントの異形の民と同様に、怪物的な他者の表象であった。食人という行為が怪物的な形象を持つことと同様に、非人間性・獣性を表わすものだったのである。ヒュームが指摘するように、彼らの食人習慣について語られるとき、彼らは犬、虎、狼、さらには悪魔といったものに喩えられたのだ²⁶⁾。

2. カニバルとカリベ

コロンブスの第一回目の航海において、彼らはカニバルに実際に会ったわけではなく、彼らが出会ったインディオの話を解釈したものであり、カニバルの表記ですら一定するものではなかった。ここではコロンブスが自分たちと出会った善良なインディオがカニバルに脅かされている、という認識を持ったにすぎない。しかし第2回目の航海では食人の習慣を持った民族の存在は具体的に語られるようになる。この航海に同行したチャンカ博士の書簡では次のようなカリベ族の食人習慣が語られている。

このカリベ族の風習は動物的であります。[中略]。彼らは全く信じられないほど残忍で、彼らの子供でも、彼女たち[妾にした敵対する部族の女性]が生んだものは喰ってしまい、自分達の妻に生まれた子供だけを育てるということであります。彼らは、男は生きたまを自分の家へ連れて行き、これをなぶり殺しにして、すぐに喰らうのであり

ます。

人間の肉は非常に美味で、これほどうまいものはこの世にはないということですが、実際彼らの家でわれわれが見つけた骨は、かじれるだけかじってあり、固くてどうしても喰えないところだけしか残しておりません。一軒の家では、鍋で人間の首筋を煮ているのを見つけました。彼らは男の子を捕えてくると、その局部を切ってしまうから彼らが大きくなるまで使い、そして祭典の際に、彼らを殺して喰うのであります。それは男の子供や、女の肉を喰ってもあまりうまくないからだそうです。われわれのところへこうした男の子供が三人、逃げてきましたが、そのどれも皆局部を切られておりました²⁷⁾。

スペイン宮廷で活躍したイタリア人の人文主義者ピエトロ・マルティーレ・ダンギエラ（スペイン語名パドロ・マルティル・デ・アングレーア）は『新世界の十の書』（邦題『新世界とウマニスタ』）の第1巻第1章において、このチャンカ博士と同様のことをカリベ族の食人習慣に関して述べている。マルティーレはその際、カニバルとカリベ族を同一のものとして扱ったうえで、彼らをライオンや虎といった野獣に喩え、殺され食べられる人間を家畜に見立てている²⁸⁾。マルティーレはこのような野蛮で獐猛な民族のおぞましい風習を描く一方で、スペイン人と友好的に接した人々を善良無垢な民として描いてもいる。15世紀末から16世紀にかけて新世界はしばしば古の黄金時代と結び付けられて考えられたが、マルティーレの『十の書』の訳者である清水憲夫が述べているように、マルティーレは新世界と古の黄金時代との結び付きをいち早く提示した人物なのである²⁹⁾。コロンブスは第一回の航海でキューバやエスパニョーラ島の住人を楽園の人々のように描き³⁰⁾、一方で彼らはおぞましい習慣を持った野蛮な民族に脅かされているという認識を示した。マルティーレはそうした二分法を古代ギリシア・ローマ人の認識と結びつけたのである。またピーター・ヒュームは、マルティーレがカニバルをカリベ族だけに留まらず、コロンブスと諍いを起こした非カリベ族であるエス

パニョーラ島の住人をカニバルと表わしていることを挙げて、ここに根拠なきカニバルの決め付けの拡大と見る。つまりスペイン人の侵略に抵抗を示した場合は民族的出自に関係なくカニバル＝カリベと扱われたのである³¹⁾。コロンブスは第二回航海の報告で、カニバルを捕らえて、家畜と交換する奴隷貿易を提案している。彼らは奴隷に適した体つきであり、その非人間性は彼らの土地から離れれば失われるというのである³²⁾。コロンブスの提案は受け入れられず、スペイン王はインディオの奴隷化を禁止した。しかし1503年には通称「カニバル法」と呼ばれる法令が出され、カニバルと認定されたものは例外として奴隷にすることが認められたのである³³⁾。このようにポストコロニアル批評のカニバル分析では当初は民族名を表わすものであったのが、「人を食べるもの」という意味で敵対する人々へのレッテルに変化していったことが指摘されている³⁴⁾。とはいえ16世紀においてカニバルという呼び名は食人習慣を持つ人々を総称して使うということはまだ定着していたわけではなく、以下でも述べるように特定の民族や地域に限定するものであった。

マルティエーレは『十の書』第3巻第10章において、最近聞いた話として次のようなことを述べている。

竜の口やパリアまで[の東海岸一帯]はカリバーナと呼ばれている。この地の名はカリベあるいはカニバルに由来し、彼らはこのあたり一帯の全域に住んでいた³⁵⁾。

カニバルの地は大陸にまで及んでいるという認識はラス・カサスが要約したコロンブスの『航海誌』にも表れていたが³⁶⁾、16世紀にはこのようにカニバル＝カリベの地はアメリカ大陸の各地へと散らばり、その中心地はブラジルへと移行していった。16世紀に作られた地図において、「Caribana」（カリバーナ）ないし「カニバル」を表す「Canibales」や「Canibali」という文字が地名として南アメリカの中にも書き込まれたものが少なくないのである。これらの語が記されている位置は地図によって

大きく異なり、一定することはなかったが、マルティーレの認識とは共通しているものだと思われる。つまりカリバーナ（あるいはカニバル）という地名は、人食い＝カニバル＝カリベに由来し、その周辺には食人の習慣を持つカニバル＝カリベが定住しているという認識である。カリバーナやカニバルが書き込まれた地図には人食いを表す「*anhoropophagi*」などの文字が添えられたり³⁷⁾、食人の光景が描かれた絵が挿入されていたりしているものも少なくないのである³⁸⁾。カニバルはコロンブスの『航海誌』に登場してから食人との強い結びつきを持つものであったことでは一貫しているが、彼らの住む地は16世紀においては民族的・地理的に限定されており、またそれが時代的背景や個人的見解により大きく移動・拡大するものだったのである。

その一方、新世界で食人習慣を持った民族を表すのに、カニバル＝カリベの呼び名は必要不可欠なものではなくなっていった。人食いの習慣は、新世界の住人ないしインディオの習慣全体へと一般化されて語られていくようになったのである。彼らに対してしばしば「野蛮人」と言う呼び名が使われたが、「インディオ」や「野蛮人」と呼ばれた人々には「人食い」のイメージが欠かせない要素として組み込まれていたのである。そしてそのような食人のイメージは16世紀においてスペイン人の新世界における蛮行の免罪符として大いに活用された。このようなインディオ＝人食いというイメージを植えつけた代表的なスペイン人であるゴンサロ・フェルナンデス・オビエードは次のように述べている。

これらの地方〔カリブ海諸島、ヌエバ・エスパーニャ、ニカラグア、その他新大陸の大部分〕では、人間を生け贄にするのは日常茶飯事で、人肉を食べるのも、フランスやスペインやイタリアで羊や牛の肉を口にするのと同じくらい、ごく普通のことなのである³⁹⁾。

またモンテーニュなどフランスの知識人の間で広く参照されていたフランシスコ・ロペス・デ・ゴマラの『インディアス全史』でも、次のよう

にインディオの支配が礼讃されている。

インディオたちは我らが神が唾棄し天罰を下される偶像崇拜、人の生け贄、人肉食い、男色、その他の大罪、罪悪を捨てたのである。また古くからの因習で快楽の対象と化した女性を、肉欲に走る男どもからスペイン人は救い出した。スペイン人は彼らに文字を教えたが、文字のない人間は動物と同じであり、人間にどうしても必要な鉄の利用を教えた。さらには、よりよい生活を送るのに有益な習慣、技術や礼法なども教えた⁴⁰⁾。

バリエドリ論争でインディオとの戦争と奴隷化を擁護し、ラス・カサスと論争を繰り広げたファン・ヒメス・デ・セプールベダも、インディオが生まれつきの奴隷である論拠として、当然のこととして彼らの食人習慣を引き合いに出した⁴¹⁾。こうした食人習慣を理由として支配や虐殺を正当化する説を唱えたのはオビエードやゴマラ、セプールベダのように露骨にスペインの植民地主義を礼賛したものばかりではない。先住民の奴隷化の欺瞞を批判したフランシスコ・デ・ビトリアも、このような自然に反する習慣をもったインディオを放置することは周囲に悪影響を及ぼすとして、人食いや男色を行っているものは罰してもいいとした。彼もスペイン王家の意向に沿う形で、人食いと認定されたインディオへの暴力を容認したのである⁴²⁾。

3. カニバルとトゥピナンバ

以上で述べてきた「カニバル」という語は16世紀にフランス語で書かれた書物においてもしばしば登場しており、先に例としてあげたラプレーの他にも、アンデレ・テヴェ、ジャン・ド・レリー⁴³⁾、そしてモンテーニュなどのテキストでこの言葉が使用されている。わけてもモンテーニュの『エッセー』に収められた「カニバルについて」は異文化に対する寛容な認識によって注目を集め、カニバルについて論じた古典として後

世に広く知られることとなった⁴⁴⁾。そのモンテーニュが描くカニバルは、以上で述べてきたことや彼と同時代に書かれたカニバルと較べると、その定義がかなり特徴的なものであるといえる。モンテーニュは食人の習慣を持った人々を皆一様にカニバルと呼んでいるわけではなく、またそれが具体的にどの地域のどの民族に当てはまるのか、その適用範囲がはっきりしたものではない。彼は『エッセー』の中でスキタイやインドでの食人の習慣を持った人々についても言及しているが、彼らに対してカニバルと呼び名として用いていない。モンテーニュがカニバルという呼び名を使っている人々は、スキタイ人と違って人肉を常食しているわけではなく、捕虜となった敵を処刑後に食べる以外に人肉食を行うことがないというのである。「カニバルについて」は新世界について述べたものであるが、モンテーニュのカニバルはコロンブスの『航海誌』やマルティエーレらが言及しているカニバル＝カリベともかなり性質が異なるのである。モンテーニュはカニバルについての情報源がブラジル帰りの彼の使用人であること、カニバル達がポルトガル人と敵対していること、また彼は1562年にフランスのルーアンで実際に三人のカニバルと会談したと「カニバルについて」の中で語っている。こうした状況を照らし合わせるとフランス人が1555年から1560年にかけてグアナバラ湾に築いていた植民地付近に居住していたトゥピナンバ族のことを参照して述べているように思われている。彼らについては当時すでに様々な書物で紹介されており、食人族としてヨーロッパでも知られていた。彼らはポルトガル人とは敵対したが、フランス人とは友好的な関係を結び、マルガジャ族などの敵対する部族を捕虜にしたら処刑し、その肉体を食べていたと語られている。これまで食べられてきた親族や仲間に対する弔いのためである。しかしながら彼らに食人習慣があるにしても、モンテーニュがトゥピナンバ族と思いき人々に対してカニバルと呼ぶことは特異なことであるといえる。というのもトゥピナンバ族に関する先行文献であり、当然モンテーニュも参照していると思われるテヴェエレリーにおいては、彼らの呼び名は民族名以外ではもっぱら野蛮人を意味する «sauvages» や

«barbares»⁴⁵が使用されているのだ。しかもテヴェやレリーがカニバルという語彙を使っていなかったわけではなく、別の民族に対してはこの語を呼び名として用いており、トゥピナンバ族と対照をなすものにもなっているのである。例えばテヴェはカニバルについて次のように述べている。

ところでこのサント・アグスティーン岬からマラニョンあたりまでの人々 [canibales] はアメリカの中でも最も残忍で非人間的である。このものたちは普段から我々が羊を食べるように人肉を食べ、それを至高の喜びとするのである。飢えたライオンのように食べることを欲する故に、彼らにいったん両手で捕まえられると、そこから逃れることは困難なのだ⁴⁵。

テヴェの地理的な記述は現代から見れば支離滅裂なものであるのだが、いずれにせよ彼におけるカニバルはアメリカの一部の地域に住む人間のことだといえる⁴⁶。彼はラプラタ川流域⁴⁷やアマゾン川流域⁴⁸、さらにフロリダ⁴⁹についても食人習慣を持つ民族がいると述べているが、彼らに対してカニバルという呼び名を使っていない。テヴェにおいてカニバルは人食いのイメージと切り離すことのできない深い結びつきがあるにせよ、アメリカのごく一部の地域の住人を指すものであり、総称的に用いるものではなかったのである。これに対してモンテーニュのカニバルという呼び名はテヴェやレリーなどにおける«sauvages»や«barbares»に対応するもの、すなわち新世界ないしブラジルの人々を一般化したものとみることのできるであろう。しかしモンテーニュは「カニバルについて」において彼らの習慣を野蛮と見なすことを厳しく批判し、自分達が彼らに対して«sauvages»や«barbares」という言葉を投げかけることを欺瞞だと見なした。彼はカニバルの習慣を、食人習慣も含めて、一貫して好意的に描くのである。モンテーニュにおいてもカニバルは食人のイメージと不可分なものではあるが、彼らは肯定的な人物像に捉え直された

のである。このように否定的な意味合いを強く帯びたカニバルという語を肯定的なものへと捉え直したことはカニバルを巡る言説においてのモンテーニュの大きな特徴だといえよう。

4. 高貴なるカニバル

ポストコロニアル批評などにおいて、異民族の食人の習慣は野蛮な他者の性質を表わすものとして機能していたことが論じられている。しかしながら食人習慣といっても一様であるわけではなく、食人習慣を持った民族の表象の間にも優劣が表わされているということもしばしば指摘されている。例えばフランク・レストランガンはテヴェエにおいて良い食人と悪い食人の区別がなされていて、トゥピナンバ族の食人習慣は前者に該当するものとしている⁵⁰⁾。彼らは復讐の手段として捕虜となった敵を食べるのであって、人肉を常食したりするわけではないからである。確かにトゥピナンバはフランス人と友好的な関係を結んだ人々であり、食人の習慣に関しても親族や仲間の復讐という大義に基づくものとして描かれている。それに対してテヴェエにおけるカニバルは我々が家畜を食するように人肉を貪り食うというのだ。とはいえテヴェエはトゥピナンバ族の食人習慣自体を肯定しているわけではないし、彼らの好ましくない習慣と思えるものに対して侮蔑的感情を露骨に見せている。テヴェエのトゥピナンバ族に対する眼差しには否定的なものも強く表されてはいるのだが、非人間性・獸的性格ばかりが強調されるテヴェエのカニバルとは趣が異なることは確かである。

しかしながら「復讐心により敵を食べる」という表現自体が西欧の食人言説においてしばしば用いられるステレオタイプであるという指摘もなされている。ヒュームは食人言説における動機として挙げられているものを4つに分類しているが、その中の一つに敵への復讐を挙げている⁵¹⁾。また南アメリカの先住民の食人習慣には肯定的なものと否定的なものに区別されているということは、ポルトガル側の資料からも指摘されている。ブラジルの歴史家ボリス・ファウストは、それは記録したも

のの偏見が反映されたものであり、ポルトガル人への抵抗に応じて先住民の肯定的性質と否定的性質が区別されていったと指摘している。

たとえば、軍事的能力に優れ、執拗な抵抗で有名なアイモレは、常に否定的に紹介されている。ヨーロッパ人の叙述によれば先住民は一般に「人間」として家に住んでいたが、アイモレは動物として森に住んでいた。トゥピナンバの人肉食は復讐のためであったが、アイモレは人肉が好きだから食べるとされた。ポルトガル国王が最初の先住民奴隷禁止令を出したとき、アイモレだけが特別に除外された⁵²⁾。

テヴェーらが南アメリカの諸民族の食人習慣を一様に扱わずに、野蛮さに差を設けてトゥピナンバ族の食人の方を理由のある行為として描いたのに対して、モンテーニュは肯定的に扱われる食人族像をさらに押し進めて、食人の習慣を持ったカニバルを楽園に住む人々として徹底して理想化した。モンテーニュにとってカニバルは食人の風習を持っていても、それは敵に対する復讐という真つ当な理由による行為であり、残酷さという点でそれをはるかに上回るヨーロッパ人にそれを非難する資格などないのである。彼にとってカニバルとは自然を享受して生きる彼の理想を映し出した民である。

したがって我々は理性の法則に従って彼らを野蛮人と呼ぶことはできても、野蛮さではあらゆる点で上回っている我々の尺度で彼らを野蛮人ということはできない。彼らの戦争は全く高貴であり、勇敢であり、人類の病が持ちうる限りの言い分と美しさがある。そこには彼らの美德の中にある競争心以外に土台となっているものはないのだ。彼らは新たな領土を欲して争っているわけではない。というのも彼らは自分たちの境界線を拡張することなしに、仕事や苦役をすることなく必要なものはすべて集められるだけの自然の恵みを享受している。彼らは自然の欲求に従ってしか欲しないという、いまだ幸福な段階にいるの

である。それ以上のものすべてが彼らにとって余計なものなのである⁵³⁾。

モンテーニュはこのようにカニバルたちを楽園に住む人々のように、自然に即した生活を営む人々として描くのである。そしてまた彼はゴマラにおいてスペイン人がインディオに教えたというものを無用の長物として蔑み、そのようなものを持たないカニバルを優位なものとして描くのである。

こうした高貴なる人食いという表象は彼以前に描かれなかったというわけでは決してない。例えば先に言及したマンデヴィルの描く犬頭人は次のような人々である。

この島の住人は男も女も犬の頭を持ついわゆる犬頭種族であるが、理性を持ち、優れた悟性にも恵まれている。ただ彼らは雄牛を神と崇め、誰もが頭に金か銀でできた雄牛像をつけて神を敬う証としている。人々は裸で暮らしている。両膝までの小さな布で腰を覆っているだけだ。彼らは偉大な民族であり、戦争に際しても勇敢である。戦いに挑めば全身を覆うほどの大きな楯と槍を持ち、敵を捕えれば直ちにこれを食べてしまう⁵⁴⁾。

マンデヴィルにおいて食人の習慣を持った犬頭人は野蛮人ではなく、優れた理性と勇敢さを兼ねそろえた民族であり、モンテーニュのカニバルの前身と呼べるものなのである。しかしながら食人言説が植民地主義と結びつくようになった16世紀において、かつての食人言説に見られた食人を野蛮と思うこと自体に疑義を示す見方は表に出ることはなくなっていた。扇情的に描かれたアメリカの先住民の食人習慣は、ヨーロッパ人のエグゾティズムを満足させる一方で、根絶させるべき野蛮な習慣として植民地主義を正当化するものとなったのだ。こうした中で、モンテーニュはカニバル登場以前の食人言説に見られた食人族像をカニバルと重ね合わせた。そして彼は食人習慣を持つ彼らが野蛮人であるという見方

に疑義を示し、逆に彼らの側から見れば、自分たちは野蛮人にしか映らないということを示し、自分たちの側の世界の有り様を批判したのである。

おわりに

以上において15世紀末から16世紀にかけてのカニバルの表象の変遷を、コロンブスやテヴェ、そしてモンテーニュを中心に取り上げてきた。ポストコロニアル批評で指摘されるように、カニバルに関する言説は植民地主義を色濃く帯びたものであり、それまでの食人言説とは異質性のあるものだといえる。しかしカニバルの表象自体は古代からの食人言説で語られる食人族の表象と連続性を持ったものである。とりわけモンテーニュは、カニバルをカニバル登場以前の食人族像と結びつけることによって、新しいカニバル像と食人に関しての新しい視座を付与したのだ。

(博士課程後期課程)

注

- 1) «Cannibales». 15世紀末から16世紀にかけて、この語の表記は一定しておらず、様々な綴りがある。また各言語によっても発音や表記が微妙に異なっており、そのためカタカナ表記では「カニバレス」や「カニバリ」などとした方が原語の発音に近い場合がある。しかしここでは混乱を避けるため翻訳を引用するとき以外はカタカナでは「カニバル」と表記する。
- 2) カニバルと西欧の植民地主義との関係を論じたものは数多くあるが、その最も基本的な文献はピーター・ヒュームの以下の文献である。Hulme, Peter, *Colonial Encounters : Europe and the Native Caribbean, 1492-1797*, Routledge, 1992. (ヒューム、ピーター『征服の修辞学』岩尾龍太郎・正木恒夫・本橋哲也訳、法政大学出版局、1995)。またポストコロニアル批評のキーワードとして「カニバル」を簡潔に説明したものとしては以下のものを参照されたい。Ashcroft, B., G. Griffiths; H. Tiffin, *Post-colonial studies : the key concepts*, Routledge, 2000. (アッシュクロフト、ビル、ガレス・グリフィス、ヘレン・ティフィン『ポストコロニアル事典』木村公一編訳、南雲堂、2008)。

- 3) Attali, Jacques, *Ordre cannibal : Vie et mort de la médecine*, Gresset, 1979. (アタリ、ジャック『カニバリズムの秩序：生とは何か死とは何か』金塚貞文訳、みすず書房、1984). Lévi-Strauss, Claude, «Siamo Tutti Cannibali», <http://ricerca.repubblica.it/repubblica/archivio/repubblica1993/10/10/siamo-tutti-cannibali.html> (2012年11月27日現在)(レヴィ=ストロース、クロード「われらみな食人種」泉克典訳、『思想』、岩波書店、2008年第12号、N. 1016). ボードリヤール、ジャン「カーニヴァルとカニバル」『なぜすべてが消滅しなかったのか』塚原史訳、筑摩書房、2009.
- 4) Lomba, Ania, *Colonialism-postcolonialism*, Routledge, The new critical idiom, 1998, p. 66. (ルーンバ、アーニャ『ポストコロニアル理論入門』吉原ゆかり訳、松柏社、2001).
- 5) «canis」とカニバルの結びつきに関しては後でも言及する。一方、「carnaval」はラテン語の「肉断ち」を起源とする語であり、直接的にカニバルとは関係がないが、その類似性から両者が結び付けられることが多い。例えばロバート・スタムや今福竜太などはバフチンのカーニヴァル論とブラジルにおける食人の表象と関連付けて論じている。Cf. Stam, Robert, *Subversive pleasures : Bakhtin, cultural criticism, and film*, Johns Hopkins University Press, 1989. (スタム、ロバート『転倒させる快楽：バフチン、文化批評、映画』法政大学出版局、叢書・ウニベルシタス、2002)。今福竜太『クレオール主義』青土社、改訂増補版、2001.
- 6) コロンブス『コロンブス航海誌』林屋永吉訳、岩波書店、岩波文庫、1977、pp. 101-102.
- 7) *Ibid.*, pp. 108-109.
- 8) 古代ギリシア人は一つ目の民族(アリマスボイ)がスキタイ北部に住むものと考えられてきた(ヘロドトス『歴史』4巻13、岩波書店、岩波文庫、1973、中、p. 14. *Ibid.*, 4巻27、p. 21. プリニウス第7巻2、p. 298)。また中世からルネサンス期にかけての異国のイメージに多大な影響を与えた『マンデヴィルの旅』はアンダマン諸島には次のような一つ目の巨人たちが住む島があると述べている。「それらの島の一つには巨人族のように図体の大きな人間が住んでいる。見るもおぞましい民で、額のまん中に目が一つしかなく、彼らは生肉と生魚以外は食べない」(マンデヴィル、ジョン『マンデヴィルの旅』、福井秀加/和田章監訳、英宝社、1997、第23章、p. 175)。
- 9) 他にも『マンデヴィルの旅』では、顔のない人間や馬の足をした人間など様々な異形の民が列挙されている (*Ibid.*, pp. 175-176)。
- 10) コロンブス、*op. cit.*, p. 80.
- 11) ヘロドトス、*op. cit.*, 4巻192、p. 108。「事実この地域には、巨大な蛇やライオン

が下り、また象、熊、毒蛇、角のある騾馬、犬頭人、それに——少なくともリビア人のいうところでは——胸に目のある無頭人、野生の男女、その他右のように架空でない様々な動物が生息している」。

- 12) アウグスティヌス『神の国』(四)、岩波文庫、岩波書店、第16巻第8章、p. 148.
- 13) Cf. White, David Gordon, *Myth of the Dog-man*, University of Chicago Press, 1991. (ホホワイト、デイヴィッド・ゴードン『犬人怪物の神話：西欧、インド、中国文化圏におけるドックマン伝承』、金利光訳、工作舎、2001).
- 14) ポーロ、マルコ『完訳東方見聞録2』愛宕松男訳注、平凡社、平凡社ライブラリー、2000、第6章148、p. 227.
- 15) マンデヴィル、*op. cit.*, p. 171. マンデヴィルの犬頭人については後でも言及するが、ポーロとは対照的に人食いの習慣を持っているが、優れた理性と理解力を持った民だと賞賛している。
- 16) Hulme, *op. cit.*, p. 101.
- 17) Rabelais, *Le Quart Livre*, [in], *Œuvres Complètes Rabelais*, Éditions Garnier, Tome II, 1962, p. 249.
- 18) ギリシア神話に登場する伝説の女人族で、トロイア戦争でアキレウスに殺されたペントレイシアやテセウスの妻アンティオペなどが有名。スキタイ人とアマゾン族との関わりについては、古くはヘロドトスにもスキタイ人とアマゾンの女戦士達との交わりが描かれている(ヘロドトス、*op. cit.*, 4巻110-115, pp. 64-67)。またストラボンにも北方アジアにおけるアマゾン族について言及しているが、彼はその実在性に対して疑問を投げかけている(ストラボン『ギリシア・ローマ世界地誌』II、飯尾都人訳、龍溪書舎、1994、pp. 46-48)。しかしその後もアマゾン族は現実にいるものと信じられ続け、『マンデヴィルの旅』などでも描かれている(マンデヴィル、*op. cit.*, pp. 137-138)。さらに16世紀になると彼女たちが南アメリカに在るとして考えられるようになった。アンドレ・テヴェも『南極フランス異聞』63章でアマゾン族のことを取り上げられている(Thevet, André, *Le Brésil d'André Thevet : Les Singularités de la France Antarctique(1557)*, ch. 63).
- 19) White, *op. cit.*, pp. 32-33.
- 20) *Ibid.*, pp. 32-33, pp. 63-64.
- 21) ヘロドトス、第4巻18、p. 17.
- 22) 「遠く離れた地方には目玉が一つだけの人間だとか、犬のような鼻づらをした人間だとかが住んでいて、その連中は人肉を食ったり、ひとを捕まえるとすぐさま首をはね、男根を切り取ったりすること、こういうことをインディオたちが言おうとしているものと、キリスト教徒は理解したと。だがしかし、このあたりの地

域でそのような怪物が見つかったことは一度もないので、キリスト教徒には彼らのことばが分からなかったのだろう。もっとも、インディオたちが言おうとしていたのは、カリベ [カリベ] と呼ばれるある島々に住んでいる、人肉を食う種族のことだったのかもしれない ラス・カサス『インディアス史 (一)』長南実訳、石原保徳編、岩波書店、第1巻第45章、p. 280.

- 23) コロンブス、クリストファー「第一次航海の報告」『全航海の報告』林屋永吉訳、岩波書店、岩波文庫、2011、pp. 55-56. クアリス島については正確なことはよくわかっていないが、ドミニカ島のことだと推測されている。
- 24) フェルディナンド・マゼラン (マガリャンイス) の世界周遊の航海者取材したトランシルヴァーノも彼らが異形の人間に出会わなかったことを、驚きを見せながら報告している。トランシルヴァーノ『モルッカ諸島遠征調書』[in]『マゼラン最初の世界一周航海』長南実訳、岩波書店、岩波文庫、2011、p. 262.
- 25) マゼランの世界周航に同行したというアントニオ・ピガフェッタは足が異様に大きい巨人について言及し、彼らをバダゴン (「足の大きい人」という意味) と呼んだが、現実には彼らに会ったというピガフェッタの記述には次のような極めて現実離れた記述がみられる「この男の背の高いことと言ったら、われわれは彼の腰までしかとどかなかった」(ピガフェッタ『最初の世界周航』[in]『マゼラン最初の世界一周航海』、p. 36).
- 26) Hulme, *op. cit.*, p. 101. ヒュームはMartire, *op. cit.*, pp. 66-67.を例に挙げているが、同様に食人習慣を持った人々を虎や狼、あるいは悪魔などに見立てているものは枚挙に暇がない。本稿の引用文においてもこうした表現が見られるので確認されたい。
- 27) コロンブス「第二次航海の報告 (1)」、『全航海の報告』、pp. 76-77.
- 28) Martire, Pietro, *The First Decade*, [in], Arber, Edward[ed.], *The First Three Books on America*, 1885. pp. 66-67. 第1巻が出版されたのが1511年になるが、執筆は1493年から1510年にわたる。引用文が収められた第1章の末尾には「スペイン宮廷にて、1493年11月13日」という文言が記されている。
- 29) マルティル、ペドロ『新世界とウマニスタ』清水憲男訳、アンソロジー新世界の挑戦、岩波書店、1993、pp. 253-254.
- 30) コロンブス『航海誌』、pp. 168-169.
- 31) Hulme, *op. cit.*, p. 69.
- 32) コロンブス「第二次航海の報告 (2)」、『全航海の報告』、pp. 122-125.
- 33) この法令は以下の論文にスペイン語原文と英語訳が引用されている (Palencia-Roth, Michael, «The Cannibal law of 1503», Williams, Jerry M., Lewis, Robert

- E.[eds.], *Early Images of the Americas: Transfer and Invention*, University of Arizona Press, 1993, pp. 22–26). また16世紀に書かれた書物においても、例えばフランシスコ・ロベス・デ・ゴマラの『インディアス全史』(1552) でこのことについての言及がなされている(ゴマラ『拡がりゆく視圏』清水憲男訳、岩波書店、アンソロジー新世界の挑戦、第217章、p. 278).
- 34) Hulme, *op. cit.*, p. 72.
- 35) Martire, Pietro, *The Third Decade*, [in], Arber[ed.], 1885, p. 183.
- 36) コロンブスは「エスパニョーラ島の背後にカリタバと呼ばれる無限に広い大陸」があることをインディオの言葉から理解したという(コロンブス『航海誌』、p. 133).
- 37) Wolff, Hans[ed.], *America : Early Maps of the New World*, Prestel, 1992, p. 156.
- 38) *Ibid.*, p. 176, p. 180.
- 39) オビエド『カリブ海植民地の眼差し』染田秀藤/篠原愛人訳、岩波書店、アンソロジー新世界の挑戦、1994、第5巻第3章、p. 147).
- 40) ゴマラ、*op. cit.*、第224章、p. 298.
- 41) Cf. セプールベダ『第二のデモクラテス、もしくはインディオに対する戦争の正当原因についての対話』[in]『征服戦争は是か非か』染田秀藤訳、岩波書店、アンソロジー新世界の挑戦、1992.
- 42) ビトリア「インディオについて(第2部)」、『人類共通の法を求めて』佐々木孝訳、岩波書店、アンソロジー新世界の挑戦、pp. 137–138.
- 43) ジャン・ド・レリーは『ブラジル旅行記』(1578)の著者として知られ、モンテニューなどに少なからぬ影響を与えた。ここでは紙面の都合上彼についての言及は割愛するが、別の機会に彼を取り上げることにしたい。
- 44) Montaigne, Michel de, *Les Essais*, livre 1, ch. 30, « Des Cannibales », bibliothèque de la Pléiade, 2007.
- 45) Thevet, André, *Le Brésil d'André Thevet: Les Singularités de la France Antarctique (1557)*, ch. 61, p. 307. マラニオンはブラジル北東部にある地域であるが、1612年から1615年にかけてフランス人が植民地を築いた地としても知られる。マラニオンは16世紀半ばにフランス人が築いた植民地からは遠く離れた場所であるが、この地でフランス人入植者と交友を持った先住民もトゥピナンパと呼ばれていた。また現在ペルーにはマラニオン川というアマゾン川の本流となる川があるが、16世紀にはアマゾン川のことをマラニオン川とも呼ばれていた。しかしながらテヴェはアマゾン川のことをオルラーヌ川ないしアマゾン川と呼び、マラニオン川と区別している。テヴェによればマラニオン川はペルーの地とカニバルの地を分ける川で、ペルーから流れるオルラーヌ川と合流しているのだという(Thevet, *op.*

- cit.*, ch. 61, p. 310). また彼はアンティル諸島のことをペルー諸島とも呼んでいる (*Ibid.*, ch. 71).
- 46) テヴェは、カニバルはマラニオン周辺だけにいるのではなく、エスパニョーラ島の北にカニバルの島がある、と述べている (*Ibid.*, chap. 71).
- 47) 「そこから100里ほどのところに戦争ばかりしている別の野蛮人がいる。彼らは巨人のように大きく、カニバルのようにほとんど人肉しか食わずに生きている」。(Thevet, *op. cit.*, ch. 55, p. 280). 先に述べたように、巨人の国、及びブラタ川の巨人の人食いについては上述したピガフェッタによって流布されたものと考えられている。またピガフェッタはラ・ブランタ川で出会った巨人の男（後にピガフェッタは「バダゴン」と呼ぶこととなる）に対して「カニバル [canibali] と呼ばれる人食い」とも述べている（ピガフェッタ, *op. cit.*, p. 33).
- 48) 「そのうえこの川 [アマゾン川] は全域にわたって危険で、水上や川岸にいる民族はとても非人間的で野蛮で、入り込まれて略奪されるのを恐れてよそものに長年敵意を抱き続けているのだ。偶然彼らがよそものに出くわしたら、容赦なく殺して、他の肉と同じように焼いたり煮たりして食べてしまう」(Thevet, *op. cit.*, ch. 62, p. 314).
- 49) 「(フロリダ半島の) あるものは、先に述べたアメリカの部族と同様に敵を捕まえたなら食べるのである」(*Ibid.*, ch. 74, p. 365).
- 50) Lestlingant Frank, *Cannibals : The Discovery and Representation of the Cannibal from Columbus to Jule Verne*, Polity Press, 1997, p. 69.
- 51) Hulme, *op. cit.*, pp. 79-80. その他にヒュームは生まれつきの習性、遺族に対しての儀礼、必要な栄養を補給するため、という理由を挙げているが、彼は食人に関する文献から得られる食人の理由はこの4種類の答えしかないと指摘している。
- 52) ファウスト、ボリス『ブラジル史』鈴木茂訳、明石書店、世界歴史叢書、2008、p. 19.
- 53) Montaigne, *op. cit.*, pp. 216-217.
- 54) マンデヴィル、*op. cit.*, p. 171.